§6-1.

本研究の結論

（1）顔の性別認知における肌色の影響の解明

＊ 同じ形態の顔であっても肌色によって性別判断が変わる可能性がある。具体的な傾向として、色黒肌の場合は男性方向に、色白肌の場合は女性方向に性別判断が引き寄せられることが指摘できる。但し、当該の肌色の作用には形態的な曖昧性が要件となる。

＊ 同じ形態の顔であっても肌色によって性別の印象は変化する。具体的には、色黒肌が男性方向に、色白肌は女性方向に印象を引寄せるといえる。また、この傾向は、形態情報のみでも性別判断が安定する顔において顕著となる。

＊ 同じ肌色の明るさであっても顔の形態によって肌色の明るさが変わって感じられる可能性がある。特に男性的な形態が伴う場合には色黒に捉えられ易い。

＊ 男女の顔形態を合成する操作の上では、性別判断が安定する「飽和点」というべき合成ポイントが存在することが考えられる。3/4（75％）以上一方の顔パタンが含まれていれば性別判断は安定し、また、これ以上に片方のパタンの比率が高まったとしても性別の印象の変化は過小評価される傾向にある。

（2）顔の性別認知のメカニズムにおける肌色の導入

＊ 性別判断と性別の印象分析は別の処理過程として捉える必要がある。

＊ 性別判断は第一に形態的な情報によって規定され、前述のような肌色の作用は、形態的な依拠が困難な場合により顕著となる（男女のパタンが拮抗して合成された顔に対する判断や、十分な観察時間がない場合など）。

＊ 性別の印象における肌色の作用条件を踏まえた場合、男女それぞれのカテゴリにおいては肌色と性別の印象との関係付けが十分になされており、形態的に中庸なパタンの場合には当該の情報の蓄積が不十分であることが考えられる。

(3) 認知傾向に基づくジェンダーの再考

＊ 好ましいとされる肌の色には性差が存在し、特に女性には色白の明るい肌が望まれており、従来の肌色におけるステレオタイプは確実に存在するといえる。また、実際の肌色についても性差が存在する。

＊ 女性において色白肌を志向する傾向が顕著であり、反対に男性の場合は志向する肌色の方向性が不明確であったことから、女性に対してより強く肌色に対する方向づけがなされていることが推測される。

＊ 上記の傾向は視覚経験された男女の像を暗示するものであり、描かれ方の男女差、実像上においても広がる男女差について考える必要がある。